

新美南吉記念館だより

新美南吉生誕 100 年まで 1 年 5 か月

発行 新美南吉記念館 〒 475-0966 愛知県半田市岩滑西町 1-10-1 TEL0569(26)4888 <http://www.nankichi.gr.jp>



春のミニ展示 「南吉と精文館の児童雑誌」 新資料が語る若き日の南吉と児童文学界

現在、新美南吉記念館では春のミニ展示を開催しています(5月13日)。新たに収蔵することになった児童雑誌『カシコイ一年小学生』『カシコイ二年小学生』(精文館)についてご紹介しています。

「カシコイ」

シコイ一年小学生 『カシコイ二年小学生』
「小さい神さま」というタイトルで『カシコイ二年小学生』に掲載されたことがわかっていったほか、彼の日記などから「あめだま」を始めとする数編が掲載された可能性が指摘されています。しかし入手が困難なうえ専門図書館もほとんど収蔵しておらず、現物での確認はできていませんでした。

「子どものすきな神さま」
生(左写真)は、新美南吉が東京時代(昭和七年十一月)、作品を発表していた雑誌です。以前から、「子どものすきな神さま」

平成二十二年秋、精文館創業者の遺族のもとに、南吉の作品が掲載された四冊を含む二十六冊が現存することが判明しました。その後、一冊を除く二十五冊を譲っていただくことができました。確認したところ、南吉の童話四編(「アメダマ」「ウマノアシ(あし)」「影(タレノカゲ)」「小さい神さま」)が掲載されていたほか、

浜田広介や北原白秋など、当時第一線で活躍していた作家や、異聖歌や与田準一など南吉と関わりの深い作家の作品も多く掲載されていることがわかりました。今回の春のミニ展示では、『カシコイ』両誌に掲載された南吉作品を中心に、両誌を調査してわかったこと、そこから見えてくる童話、童謡作家たちの当時の様子について紹介しています。



▲ 東京時代の南吉

【南吉と『カシコイ』両誌】
昭和七年四月、新美南吉は東京外国語学校に入学しました。当時の南吉にとって、主な作品発表の場は、上京前から引き続き『赤い鳥』(赤い鳥社)と同人誌『チチノキ』(チチノキ社)でした。しかし昭和八年に入ると、『赤い鳥』の主宰者鈴木三重吉と、同誌で投稿童謡欄の選者を勤めていた北原白秋が訣

別し、白秋が同誌を去ったことから、門下である南吉からも同誌から手を引かざるを得なくなりまし。さらに、もう一方の『チチノキ』も休刊状態になっていました。南吉の作品が『カシコイ』両誌に掲載されるようになったのはちょうどその頃のこと。それまでの商業誌への投稿や同人誌への寄稿とは異なり、精文館は南吉に原稿料を支払い、誌面でもプロの作家と変わらない扱いをしています。作家を志し上京してきた南吉にとって、『カシコイ』両誌が大切な作品発表の場であったことは間違いないでしょう。未見の号も相当数あり、そちらにも南吉作品が掲載されている可能性があります。

す。今後、そうした号が発見されることを期待しています。

『泣いた赤おに』の初出誌

浜田広介の代表作「泣いた赤おに」が初めて発表されたのが『カシコイ二年小学生』です。以前から同誌が初出であることはわかっています。ところが、時期については諸説あり、タイトルは「鬼の涙」だと言われています。今回収蔵した中に「泣いた赤おに」前半の三回が掲載された号があり、昭和八年八月号から「おにのさうだん」というタイトルで連載されたことがわかりました。長年、諸説あった「泣いた赤おに」の初出誌がはつきりしたこと、同作の最初の形がわかったことは大きな収穫だったと言えるでしょう。

『カシコイ』両誌に集った作家たち

北原白秋、小川未明、坪田譲治、巽聖歌、与田準一、奈街三郎、渡辺哲雄……。『カシコイ』両誌に作品を発表していた童話、童謡作家たちです。出版社に勤めてい



▲浜田広介／昭和 11 年撮影
提供 財団法人浜田広介記念館

た聖歌、昭和十年頃まで作家として認められず困窮状態にあった坪田、雑誌編集の仕事をしてきた渡辺、奈街など、多くの作家が経済的に恵まれず、創作活動に専念できる状態にはありませんでした。この時期彼らの作品は『カシコイ』以外の雑誌にも発表されています。その一つが『コドモクニ』でした。同誌は、『カシコイ』同様白秋が童謡顧問をしていたことから、彼の門下である聖歌や与田の作品が多く掲載されました。童話顧問は未明で、編集は未明門下の奈街でした。彼らの当時の様子を見ていくと、厳しい状況下でも、師弟という縦のつながり、作家、編集者同士の横のつながりを生かして作品発表の場を与え合い、意欲的に創作活動に励んでいたことがわかってきます。

ウィンターアタック特別企画

『新美南吉クッキング』開催!

昨年十二月二十五日(日)、半田市生涯学習課主催のウィンターアタック(冬休み小学生体験講座) 特別企画「新美南吉クッキング」が開催されました。新美南吉記念館で学び、半田市立さくら小学校で、南吉の生きた時代の食材で調理、最後に南吉童話の紙芝居鑑賞と盛りだくさんの内容でした。

南

吉記念館では、遠山学芸員から、新美南吉の生涯や作品に込められた思いなどを、展示をまわりながら話していただきました。南吉が書いたラブレターをじつと眺める女の子もいれば、南吉の通知表に興味津々の子も。新美南吉を身近で大切な存在だと改めて感じる時間となりました。

足を運び、南吉が生きた時代背景、南吉の生涯や思想などを念頭に、「人間が手をかけた、生きとし生けるものを食べ物として頂けることのありがたさを感じてもらいたい」との思いをもって講師を務めてくださいました。大谷さんが徹夜でお煮しめにした、地元半田の三八市で仕入れた野菜を、記念館から見た権現山の景色を思い浮かべながらお弁当に詰めたり(右下写真)、有脇産のお米を使った麦飯でおにぎりを作ったり、煮干しと昆布で出汁をとっておみそ汁を作ったりして、お昼をいただきます。

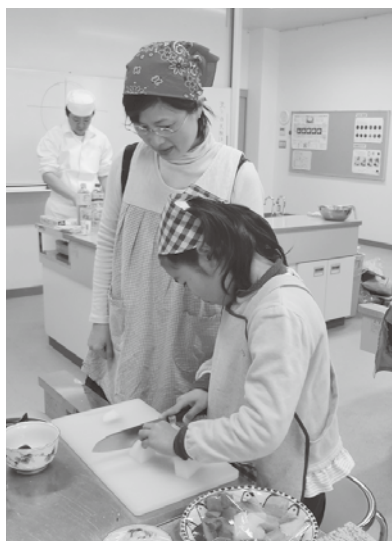


受講された方からは「南吉について、食・著書・紙芝居など、多方面から考えることができました。地元・地産地消を考えるよい機会でした。」「南吉さんのことをいっぱい知りました。南吉さんの時代に食べていたものもいろいろわかりました。それに、食材はそのままでも美味しいことがわかりました。」などの感想が寄せられました。

郷土の作家新美南吉が、私たちに伝えてくれるメッセージを受け止めることができるような講座を、これからも開催していきたいと考えています。

(文責 生涯学習課)

北中美郷



「南吉について、食・著書・紙芝居など、多方面から考えることができました。地元・地産地消を考えるよい機会でした。」「南吉さんのことをいっぱい知りました。南吉さんの時代に食べていたものもいろいろわかりました。それに、食材はそのままでも美味しいことがわかりました。」などの感想が寄せられました。

南吉とわたし ⑬ 中川 やよひ



私は新美南吉さんが「兄さん兄さん」と呼んでくださった異聖歌の長女です。でも南吉さんを存知上げません。だって私が二歳の時に亡くなっておられるのですもの。でも昭和十七年九月に「梨を送りました。子供のおやつにして下さい」と安城の梨を東京（中野）の私の父のもとへお贈りくださったそうです。このお話は『新美南吉記念館研究紀要』第十六号（二〇〇九年）・「日本デンマークと幻の都築弥厚伝」より知りました。以来、南吉さんが急に身近になり、本の中の別世界の方ではなくなりました。

想えば父は南吉さんの作品を世に出すために一生懸命でした。依頼された作品は浄書をしなくてはならず、そのお役目が私でした。眠い時もあり、試験の時もあり、遊びたい時もあり、童話に夢中になって手が止まってしまふこともありでした。でもそれは父の作品だとばかり思っておりまして、未だに南吉さんとの区別がつかないことがあります。

疎開先の沼久内では雪の降る夜に裏山の狐がよく鳴きました。すると決まって父は「かあさんぎつねかな、子ぎつねかな」と問いました。雪掻きの後のほてった顔を家族そろって雪に押しつける遊びも父が率先して教えてくれました。また、長いこと私は和尚さんにはしっぽが付いているものだと思っておりました。振り返りますと知らず知らずのうちに南吉さんのファンタジーの世界で育てられていたようです。

絵描きの母は南吉さんのファンでよくモデ

ルになっていたようにです。長野県の諏訪美術館へ寄贈致しました「ストーブをかこむ」は南吉さんだと申しておりました。お正月が終わる頃になりますと母はよくカキモチを作ってくれましたが、南吉さんに教えていただいたそうです。私も今年は真似をして作ってみました。子供の頃が甦って参りました涙が止まらなくなりました。

父は南吉さんにお預り致した原稿に責任を感じていたのではないのでしょうか。否、純粹に作品と共にお人柄が大好きだったのではないのでしょうか。兄貴として心を尽くし力を尽くしてあげたかったのでしょうか。私はそんな父の気持ちを知らないで「自分の作品を書いて」と攻めてしまいました。晩年は改変問題で非難をされて胃を病み心臓を病んで日に日に孤独になっていく父の背中を感じずにはいられませんでした。

昨年は「ごんぎつね」誕生八十年と伺いました。おめでとございませす。父の「たきび」も誕生七十年でした。郷里の岩手では「異聖歌童謡まつり」（下写真）と『童謡曲集（CD付）』の出版コンサートを開催してくださり、私は父のふる里で父の歌を聴かせていただきまして幸せでした。又、資料を寄託いたしております日野市郷土資料館でも「童謡たきび七十年記念展」を展覧してくださいました。どうぞ南吉さんの兄貴分の詩と短歌も味わってみてくださいませ。



執筆者紹介：昭和16年生まれ。異聖歌の長女。聖歌は、南吉と同じ北原白秋門下の兄弟子で詩人。母親は春陽会所属の洋画家野村千春。

『異聖歌童謡曲集』（CD付）

「かきねの かきねの まがりかど」で始まる童謡「たきび」は、詩人異聖歌の代表作です。昭和十六年に創られ、昨年、誕生して七十年を迎えました。それを記念して、十月には郷里の岩手県で「異聖歌童謡まつり」が開催されたほか、『異聖歌童謡曲集』（左写真）が出版されました。



二十歳のとき、雑誌『赤い鳥』に投稿した童謡「水口」が北原白秋に認められ詩人の道を歩き出した聖歌。昭和四十八年に六十八歳で亡くなるまで多くの作品を遺しました。同書には曲がついた聖歌の童謡四十四曲が収められています。

たきびをする光景は見かけなくなりましたが、CDを聞きながら口ずさんでみてはいかがでしょうか。心があつたかくなりそうです。発行盛岡出版「コミュニティー

2100円

記念館からのお知らせ

新美南吉生誕百年

ごんぎつねの世界展

今年の春から一年間かけて、新美南吉生誕百年を記念した巡回展を開催することが決まりました。会期、開催地は次のとおりです。近くで開催される際には、ぜひお出かけください。

- 平成24年4月14日(土) ～ 6月17日(日)
- 丹波市立植野記念美術館 6月30日(土) ～ 8月7日(火)
- 堺市立東文化会館 9月8日(土) ～ 10月21日(日)
- 北海道立文学館 12月26日(水) ～ 平成25年1月7日(月)
- J R名古屋高島屋 平成25年2月23日(土) ～ 3月31日(日)

※巡回展の様子は次号で特集します

主催 毎日新聞社、半田市、半田市教育委員会等

春のミニ展示

南吉と精文館の児童雑誌

※新資料が語る若き日の南吉と児童文学界

平成22年、東京時代の南吉が幼年童話を発表した雑誌が発見されました。所有者から譲られた25冊の雑誌をおとして、浜田広介や北原白秋にまじり、作家の卵として創作に励む若き日の南吉をご紹介します。

- 会期 2月18日(土) ～ 5月13日(日)
- 場所 常設展示室
- ※高校生以上の方は観覧料210円が必要です。

展示室ガイド

ガイドボランティアが常設展示室をご案内します。実施日 毎週土曜日、日曜日、祝日、振替え休日

ガイドが待機している時間
午前 10時30分～12時30分
午後 13時30分～15時30分

※申込み不要。ガイドできない日もあります。

歌とお話の会

毎月第4日曜日の午後に行っています。

場所 記念館図書室

時間 13時30分～14時
出演 左近治樹さん 小野敬子さんほか

※以上の事業・行事へのお問い合わせ、お申込みは新美南吉記念館まで。
Tel 0569(26) 48888

○記念館主催の行事ではありませんが情報がいただきたいものをご紹介します。

画業40年記念
「黒井健 絵本原画の世界」

「ごんぎつね」「手ぶくろ」を買いに「ころわん」シリーズなどの絵本作品で知られる黒井健さん。今年黒井さんにとって画業40年の節目の年に当たります。

それを記念して、作家や物語との「出会い」をテーマに創作活動40年を振り返る展覧会が始まります。

新美南吉記念館からも、「手袋を買いに」の自筆原稿など、原画に関連のある資料を出品します。

会期 3月14日(水)

26日(月)
会場 東京・松屋銀座 8Fイベントスクエア

主催 読売新聞社
問い合わせ 松屋銀座
Tel 03(3567) 1211

日誌抄

十二月(師走)

▽3、4日 「えと人形をぬろう」開催。於工作室。98名参加▽8日 集団読書テキスト『新美南吉童話集』(4冊組)発売▽10日 第23回新美南吉童話賞表彰式▽15日 半田市立有脇小学校で出前授業▽18日 第100回新美南吉研究会。於会議室。14名参加▽22日 北海道新聞「旅」欄に記念館が取りあげられる▽25日 ウィンターアタック「新美南吉クッキング」開催。於

新美南吉記念館、半田市立さくら小学校 一月(睦月)

▽8日 新美南吉文学講座 第1回。於クラシテイ半田 ミーティングルーム。22名参加▽24日 半田市立岩滑小学校で出前授業▽同日 CBCテレビ「イッポウ」取材▽29日 新美南吉文学講座 第2回。於クラシテイ半田 ミーティングルーム。26名参加

〈4月の休館日〉
2日(月)、9日(月)、10日(火)、16日(月)、23日(月)、

〈5月の休館日〉
1日(火)、7日(月)、8日(火)、14日(月)、21日(月)、28日(月)

※4月30日(月)は、祝日のため開館し、翌5月1日(火)は休館いたします。



ペーパーアート
「こぞうさんのおきょう」
榎原澄香 作

おしょうさんに代わって、お経を読むことになったこぞうさんでしたが…。